信州読書会　YouTubeLive&ツイキャス読書会

課題図書　岡本かの子 『越年』

信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
（募集要項はメルマガでお伝えします）
また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会　ツイキャス　http://twitcasting.tv/skypebookclub
YouTubeLive　https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw
『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから　http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284
『ツイキャス読書会』 音声のバックナンバーです。
https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf
（各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。）

岡本かの子

『越年』

第 284 回の YouTube 読書会の課題図書は、岡本かの子の 『越年』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

朗読しました。

青空文庫　岡本かの子 『越年』

メルマガ読者　八王子ひげだるまさん

「水が来た。電気が来た。給与が振り込まれた」

（引用はじめ）

「年末のボーナスを受取って加奈江が社から帰ろうとしたときであった」（岡本かの子 「越年」 青空文庫）

「毎月のこととは言ひ乍（なが）ら、俸給を受取つた時の人々の顔付は又格別であつた。実に男女の教員の身にとつては、労働（はたら）いて得た収穫を眺めた時ほど愉快に感ずることは無いのである。ある人は紙の袋に封じた儘の銀貨を鳴らして見る、ある人は風呂敷に包んで重たさうに提げて見る、ある女教師は又、海老茶袴の紐の上から撫でゝ、人知れず微笑んで見るのであつた」　（島崎藤村 「破戒」 青空文庫）

（引用終わり）

「越年」は昭和 14 年、「破戒」は明治 39 年、いずれも給料は現金手渡しであっただろう。
では、給与の銀行振込がいつから浸透したか。
簡便にインターネット検索してみると、昭和 40 年代頃から給与振込が始まり、昭和 43 年の「三億円事件」で現金輸送の危険性が認識され、
昭和 49 年に政府が給与支払事務の合理化の観点から、国家公務員の給与振込の導入を決定したことを受け、全銀協で給与振込事務取扱要領の検討を行い「国庫金振込（国家公務員給与振込）の事務取扱要綱」を制定した。
サザエさんの波平は現役時代の給与は全て現金手渡しであり、ボーナスだけでなく給与も銀行振込になるのは昭和 51 年頃からである。
また昭和 44 年 12 月 1 日住友銀行、初の現金自動支払機を新宿支店等に設置ともある。
諸々の事情もあろうが、やはり根本の大きな流れとしては戦後の政府による預金奨励策、その背後にある事情であろう。

小説をいろいろ読んでいくと、こういった細かい社会的背景が気になっていくが、
志賀先生の「暗夜行路」に「少し不愉快になった時に電気が来た」とあり新潮文庫版の注釈によれば「電気が来た　電灯の普及しはじめたころには、電灯会社は夕方一定の時刻になってから、送電していた。一九九ページに「電気はまだ来ないかネ？」というセリフがある」とのことであり、
これは鴎外の「寒山拾得」の「閭（りょ）は小女を呼んで、汲みたての水を鉢に入れて来いと命じた。水が来た」にも並ぶ名文の粋であるが、
「暗夜行路」は長年に渡って複雑な経緯を辿って発表されていった小説であるので「電気が来た」のがいつ頃の年代なのか、ということになるが、
これもインターネット検索すると日本における電灯の普及は、
電気事業連合会ホームページによれば、「1912（大正元）年、東京市内に電灯がほぼ完全普及する」
「1927（昭和2）年、電灯普及率が 87%に」である。

（おわり）

※無断転載禁止

メルマガ読者　さくらさん

『越年』 感想文

　ボーナスを貰った話から始まってウキウキするような雰囲気なのに、いきなりビンタされてなんて日だ！というような感じが面白かったです。

　私は分厚いボーナスが貰えるような会社に勤めたことがありませんが加奈江はなんとなく、これは私の勝手な想像ですがたくさんボーナス貰えたんじゃないかなと思いました。

　貰えるだけ仕事のできる女性なのかな？　と思いました。

　それにきっと綺麗な人なのかもしれない。そして、プライドが高くて高嶺の花的な存在なのかな？　と想像できました。

　少女マンガとかならイケメン男子がいきなりキスしようとしたりしたら、恋が始まるかもしれないけど、イケメン男子だとしてもいきなりビンタは恋は始まらないなと思うけど、でもいきなりビンタはインパクトがあって面白いなと思いました。

　最初から加奈江の事が好きなんだなとは思いましたが、終わり方が少し切ない感じなのが岡本かの子先生らしいのかな？　とかちょっと分かったふうな事を思いました。

（おわり）

※無断転載禁止

メルマガ読者　chicks さん

『kanae. 24age/昼→丸の内 OL/夜→港区女子』

私は加奈江。丸の内で OL をしている 24 才です。
麻布の実家暮らしなので、お給料は毎月貯金しています。
冬のボーナスの日、今回も貯金かぁって思いながらインスタを覗くと、よくコメントして来る男性フォロワーから突然、中傷コメントが来ていました。

人生の中で一度でさえ、誰かに叩かれたことが無かったので困惑しました。
叩いて来た男性は直後にアカウント削除したらしいです。

当然ですが、相互フォロワー達はコメント欄で私を擁護してくれました。
中には、訴訟を勧める人もいましたが、私は Twitter の裏アカで叩き返してやろうと思い、男性の消息を辿ることにしました。
そして、男性と相互フォロワーだった人からの情報で、どうやら夜の六本木に出没しているらしいことが分かりました。

私は相互フォロワーの明子と終電間際の六本木で男性を探すことにしました。
飲食店で時間を潰している間、隣のテーブルではいわゆる港区女子達の女子会が開かれ、恋愛トークに花が咲いていました。
流行りのメイクやファッションをしない私は、この街の夜に若干の不釣り合いでしたが、六本木に来る正当な理由を持っていると信じ込むことにしました。たまにナンパ待ちと間違えられることもあったけど。

「十日もヴィーガン料理を食べると少し飽き飽きして来るのねえ」
「わかりみ！」
「ごめんね」
「ま、そのうち慣れるっしょ w」

さすがに毎晩六本木で過ごすとなると、少々散財し過ぎだったので、暮れの四日間は自粛しようということになって、越年した一月三日に再開しました。
自粛中は少し暇だったので、ZOZOTOWN で新しい服を買ったり、韓国コスメの研究をしてみたりしました。

そして遂に、私を叩いた男性との再会が実現しました。
これで六本木の夜ともお別れか…サヨナラ…。

後日、男性らしき鍵アカからインスタの DM が来ました。
私は明子に LINE しました。
「聞いてほしいことあるんだけど。今晩だいじょぶ？」

（おわり）

メルマガ読者　TOTO さん

『越年』 岡本かの子　　感想文

この小説が書かれた時期は、何となくきな臭い感じがした。
しかし年末のボーナスが出る位だから、遠くに日中戦争の声を聞き、第二次世界大戦前のなんとなく不安な雰囲気の中で、ほんのわずかでも皆が楽しもうと、張り詰める面持ちを無意識に緩和しているような印象を受けた。

（引用はじめ）

「事変下の緊縮した歳暮ははそれだけになるべく無駄を省いて、より効果的にしようとする人々の切羽詰まったような気分が街に籠って、銀ぶらする人も、裏街を飲んで歩く青年たちにもこつんとした感じが加わった」（P.133）

（引用おわり）

どう説明してよいかわからないが、この「こつんと」という言葉の響きが、その時の人々の様子を的確に表していて目に浮かぶようだったのだ。

銀座、晴れ着を着てビフテキを食べに行こうというシーンはその時代を感じさせられるのだが、この若い心もちは生き生きと伝わってきて全く古さを感じさせない。
小説全体が古臭くないのだ。

仰反るくらいに殴られるという冒頭のシーンに、「きっと好きなのだ」という直感はすぐに湧いた。
転職で既に頭がいっぱいであるのに、
そこに恋愛のケリをつけようとまでするのは無茶であり、突発的な「事件」であった。

退職届も加奈江への大切な謝罪と告白の手紙も、肝心なものは郵便を使うのもちょっと卑怯であるような。

思いつめた時に、このような行動をとる人は、内向的な小心者であるのかとも思われたが、先見の明もあり行動力もある堂島である。

犯人のように、明子をもヘトヘトにさせて、「復讐成就」させる。
上司や同僚にあれだけ扇動されたら、そしてあの涙と頭痛からは、「仕返し」はせずにはいられなかったであろう。
しかし、成し遂げた後は、虚しさだけしか残らなかったように見えた。

何であんなに夢中にそればかり考えていたのだろう、と終わってみれば馬鹿馬鹿しいと感じる時はよくある。

年末から、年を越えても執着するものは何だったのだろうかと。

そして「敵」が自分を好きだった！、とは。
この思わぬ展開によって変化していく加奈江の女心がよく表現されていて、つくづく共感してしまった。

※無断転載禁止

羞恥心とも違う、謝意とも違う、初めて堂島に感じ始めている何か。
その気持ちが芽生えつつあるラストシーンがとても良く伝わってくる。

（引用はじめ）

「加奈江は、そんなにも迫った男の感情ってあるものかしらん。今にも堂島の荒々しい熱情が自分の身体に襲いかかって来るような気がした。
加奈江は時を二回に分けて、彼の手、自分の手で夢中になってお互いを叩きあった堂島と、このまま別れてしまうのは少し無慙な思いがあった。一度会って打ち解けられたら・・・」（P.142　P.143）

（引用おわり）

この胸のざわつきは何だろう、と加奈江の気持ちが感じられる。

「敵」だった人が「打ち解けたい」、そんな人に変わってしまった「越年」。

サクサクとテンポ良くわかりやすい軽快な文章は、けっして古めかしくない新鮮な小説であった。

一作ごとにその都度かの子先生の才能に驚かされてしまうのだ。

（おわり）

メルマガ読者　hoyo さん

執着

殴ってまで他人に対して自分を印象付けようと思ったことは私にはない。

おそらく、「良いなぁ…」と思った人との今生の別れでも「寂しいなぁ…」と指を加えて見ているだけなのは間違いない。

そういう意味では堂島のことが少し羨ましい。

事実、加奈江は殴られたことによって堂島を探すようになり、銀座にお百度参りを行う。

何かに執着するというのは、愛情の一種と捉えてもいいと思う。

そういう意味で、加奈江の中で堂島が特別な存在になっていったんだと思う。

けれど、肝心の堂島にとって加奈江の存在って何なのだろう？

最初の発端は加奈江が堂島の言葉を無視したのが原因のようだが、それで殴るというのは、あまりに稚拙ではないだろうか？

加奈江に問い詰められ、殴り返されるときも、押し黙っていて後日手紙で詫びを入れるなど、終始煮え切らない態度を取っている。

結局、彼は加奈江を愛してなどおらず、自分だけを愛しているのであろう。詫びの手紙も、自身がスッキリするためだけに書いたのだろう。

本当に愛しているのなら、すべて終わったあとに、加奈江のように銀座を徘徊しなきゃ嘘であろう。他人を本当に愛するということはとても難しいことだと改めて思った。

それにしても、岡本かの子先生は女性の心の機微をこと細かく描いていて素晴らしい。昔の銀座なんて映像すら見たことないけれど、その情景が浮かんでくる、短いが良い小説だと感じました。

（おわり）

メルマガ読者　千歳飴さん

誤算！　忠臣蔵

岡本かの子の『越年』は、支配や所有をロマンスに捻じ曲げることに警鐘を鳴らす作品だと思えた。

殴り返した加奈江が、相手からの、君がスキだけど言い出せなくて殴った、謝りますという手紙を読んで、支配欲をロマンスに捻じ曲げはじめるが、相手は二度と現れず、終わる。

堂島くんの、職場への不満を晴らしたい、もう辞めるんだからやっちゃえって気持ちの、その意味はわかる。
彼がやったのは片想いの同僚への暴力だった。
好きだけど、告白して振られたら傷つくし、かと言って、いきなり抱きついてキスしたら強制猥褻で破廉恥だし、そこでどうしたかというと、殴ったのである。もちろん暴行でこれも破廉恥である。

私が子供の頃の 80 年代には、女の子が「男の子に嫌がらせされた！」と訴えると、あなたが好きだから虐めるのよ、などと、厄介払いするように言う大人がいた。
子供は今より雑に扱われていたのである。
子供たちにそのような語りかけをしたら、どんな大人に成長するか？虐められたら幸せだと思い込むようになる。歴代彼氏全員だめんず等、サド・マゾ共依存倒錯劇を、ロマンス化するようになる。

（引用はじめ）

すると、今でも僕は確信しているが、それは他でもない、彼女の顔を見るのが恥ずかしくてならなかったからだろう、僕の心に、その時不意に別の感情が火を吹き、ぱっと燃えあがったのだった……　別の感情、つまり支配欲、所有欲である。僕の目は情欲にぎらぎらと輝き、僕は折れよとばかり彼女の手を握りしめた。この瞬間、僕がどれほど彼女を憎み、どれほど彼女に惹かれたことか。この二つの感情はおたがいにあおり立てあった。それは復讐にさえ似ていた！　彼女の顔には、最初、不審そうな、というより、恐怖にも似た表情が表れたが、それも一瞬だった。彼女は喜びに狂ったように、はげしく僕を抱きしめた。【ドストエフスキー『地下室の手記』新潮文庫 P.235】

（引用おわり）

加奈江の仇討ち後に届いた堂島の手紙は、ある娼婦を侮辱してお金を渡し受け取り拒否された地下室に住む男のモノローグであって、どこまでも身勝手である。

（ここだけの話、堂島の手紙は、あやうく私も心に響くところだった。）

加奈江の〈打ち解けられたら…〉は、相手を思うというよりは、自分を誇れる機会がほしいナルシシズムで、加奈江の方も、身勝手に夢想し崇拝した偶像に堂島の名前を付けようとしていた。それも所有・支配欲であり、見込み違いのロマンスである。

（おわり）

※無断転載禁止

メルマガ読者　玉井さん

加奈江ちゃん Goes Down

本書『越年』読後の乃公、愚にもつかぬ雑考以下に捻出せり。

▼あらすじ:
堂島が加奈江を不意にビンタ → 加奈江が仕返しのビンタ → 堂島から釈明の手紙届く → 堂島は加奈江が好き → まんざらでもない加奈江 → 銀座にレッツゴー →【完】

▼序論 ～ 愛憎について ～:
人間同士が感情的・非合理的な繋がりで引き付けるものが愛情である一方、憎しみは対象に敵意を持ち排斥することであり、愛情と憎しみは両極をなしているが、両者はそれぞれ独立しているわけでなく、表裏一体とする考え方を精神分析学において「両面感情(ambivalence)」という。これを踏まえると、堂島が愛する加奈江を殴ったこと、殴られた加奈江が堂島に惹かれて再会を望んだこと、この二点は表面上は自然な心理と見なせそうだが経緯が不明である。そこで今回、精神分析学を用いて堂島および加奈江の真意を解説する。

▼雑考① ～ 堂島の性的倒錯および自己愛 ～:
堂島の場当たり的な退職理由および唐突なビンタは幼稚である。彼は性的な分化がない。つまり、彼の性的欲望は幼児同等の不定さのまま大人になったのである。これを「性的倒錯」という。その傾向として例えば、相手に攻撃を加えて苦しめることで満足を得ようとする可虐性愛(sadism)、自らを苦しめることで満足を得ようとする被虐性愛(masochism)が挙げられる。「加奈江を殴った」という点で堂島は可虐性愛者の可能性があるが、殴ったことで彼が性的な快感・興奮を得たのかは作中から読み取ることができない。が、彼の「自己愛(narcissism)」が利己主義を促して可虐性愛へと発展したと思われる。というのも、堂島の手紙によれば加奈江を殴った動機に、

<<僕は令嬢というものに対してはどうしても感情的なことが言い出せない性質>>
<<いっそ喧嘩でもしたらどうか。或あるいは憎むことによって僕を長く忘れないかも知れない。>>
<<僕もきっかり決裂した感じで気持をそらすことが出来よう。>>

とあるように、加奈江に対する配慮が欠けており、彼は彼自身のことだけに関心を示しているからである。彼は自己愛が強い。自己愛者の特徴は、自己愛が強ければ強いほど羞恥心も強くなり、また、自己愛が傷つくと激情を表す為、堂島はその心的作用により加奈江を殴ったものと思われ、そうした彼の手紙の内容を換言すれば「己の保身のために殴っちゃうぐらいシャイなオレを愛してくれますか？」の一点張りでしかない。では、その歪んだ愛情を受け入れた加奈江とは一体どういった性質の女なのか。

▼雑考② ～ 加奈江の異常心理 ～:
加奈江は被虐性愛が強い。被虐性愛者は罪悪感、無価値感を抑えようとして苦痛を求め満足を得ようとする特徴を持ち、作中の「仕返しビンタ」「手紙の読後、堂島を探し求める行動」がそれに該当しており、<<このまま別れてしまうのは少し無慙な思いがあった。>> と、彼女の堂島に対する罪悪感が窺える。ただ、加奈江の被虐性愛も堂島同様、性的な快感・興奮を得たのかどうかは判別困難だが、彼女は「道徳的被虐性愛(moral masochism)」の可能性がある。これは前述の被虐性愛の様に性的な意味合いはなく、苦痛に耐えることが道徳的であるとする考えであり、つまり、無意識的に罰を求

める要求である。例えば、普通なら幸福や満足感を得て当たり前の状況にも関わらず、不安に襲われたりあえて苦痛を受けようとする異常な心理がそうであり、ひょっとすると彼女は堂島にもう一発殴られたいのかもしれない。

▼補遺:
「脅威アピール(threat appeal)」というコミュニケーション手段がある。これは受け手を脅して恐怖心を呼び覚まし、次にそれを解消・緩和することで内容を相手に受け入れさせるという方法である。心理学者のジャニス(Irving Janis)の実験結果によると、過度の恐怖心に訴えるこの方法は恐怖の度合いが強いほど説得の効果も大きいのだという。とすれば、加奈江は堂島による脅威アピール操作の餌食になったようなものである。

といったことを考えながら、今回私が一番言いたいのは「岡本かの子は絶世の美女である」ということです。

◎参考文献:
・ナルシシズム入門／フロイト
・ラカン入門／向井雅明
・Communication and persuasion: Psychological Studies of Opinion Change／I.L. Janis, 他

以上

（おわり）

『堂島おしゃクソ事変』

（引用はじめ）

私、撲られた当座、随分口惜しかったけれど、今では段々薄れて来て、毎夜のように無駄に身体を疲らして銀座を歩くことなんか何だか莫迦（ばか）らしくなって来たの。殊に事変下でね……。

（引用おわり）

「事変」とは宣戦布告のないままの戦争状態をいう。
ルソーが社会契約論の第一編第四章で、以下のように書いている。

（引用はじめ）
宣戦ということは、権力者にたいするよりも、むしろその臣民にたいする警告なのである。
（岩波文庫『社会契約論』P.25）

（引用おわり）

宣戦布告とは、交戦国が戦争状態にあることを、相手国とその国民と国際社会と、さらには自国民に正式に伝えることである。宣戦布告しないことメリットは、国際法にのっとらず、非人道的な戦闘行為が可能なことだ。「事変」とは、非人道的な後ろめたい状況なのである。そういう非人道的な後ろめたい世相の影響もあってか、堂島潔は、理由も明かさないまま、いきなり加奈江をなぐり、会社を辞めてしまった。

これでは、堂島事変である。

加奈江は、会社とその従業員に、殴られたことを報告して、堂島探しに乗り出した。

（引用はじめ）

事変下の緊縮した歳暮はそれだけに成るべく無駄を省いて、より効果的にしようとする人々の切羽詰まったような気分が街に籠（こも）って、銀ブラする人も、裏街を飲んで歩く青年たちにも、こつんとした感じが加わった。それらの人を分けて堂島を探す加奈江と明子は反撥のようなものを心身に受けて余計に疲れを感じた。

（引用おわり）

会社の同僚同士が、理由のわからないまま、交戦状態となり、緊迫したまま年を越す姿が、生々しく描かれている。

加奈江が、松の内に裾模様の晴れ着姿で、銀座に繰り出して、とうとう堂島を探し当てて、殴り返して復讐を遂げるという描写の中に、事変下の奇妙な世相と人々の狂い始めた精神状態が透けて見えて、なんとも言えないリアリティーを醸し出している。

事変下の世相には「こつん」とした鬱屈があっただろうが、冬のボーナスが出るほど、経済的には好調であった。堂島と加奈江の勤める会社は戦時統制経済下で、軍需品を作っておそらく満洲に輸出している拓殖会社である。一応は、ボーナスがでるほど、利益は出ているが、純粋の軍需産業ではないので、堂島は、事変後の不況を見越して、もっと安定した電気会社に転職した。

加奈江は戦前に OL であったという、最初の職業婦人である。会社の書類の整理室に勤務しているので、おそらくタイピストだったのかもしれない。職業婦人で令嬢である戦前の高学歴キラキラ系リベラル女子＆高収入バビロン軍需産業系 OL である高嶺の花、加奈江への想いをこじらせて、自分で諦めをつけるために、堂島事変に及んだのである。

上司の指図で行った加奈江の無視が、堂島のミソジニー（女性蔑視）的傾向に火をつけた。俺を馬鹿にしやがって！左頬に一発。本来なら、暴行罪で、警察に告訴するべきところだ。そこまでしなかったのは、そういう告訴が受理される見込みが薄かったからかもしれないが、根本が、男女の愛憎のもつれで、告訴するのも野暮であるからであろう。考えてみれば愛憎のもつれが、事変なのである。どっかで起こっている事変も愛憎のもつれである。

愛憎のもつれが、最後の堂島の赤裸々かつ饒舌な手紙に表れていて、めんどくせえやつだなと思った。
堂島は、品川転職系おしゃべりクソ野郎である。

しかし、それはさておき、その何年かあとには、アメリカに宣戦布告し、銀座はアメリカ軍 B29 で火の海である。
事変後の不況どころではない。堂島も徴兵されたであろう。
結婚した加奈江は、夫の出征を見送り、国防婦人会で日の丸を振ったであろう。
銀座も麻布も青山も焼け野原と化し、乳飲み子を連れて防空壕で眠れぬ日々を過ごしたかもしれない。
堂島は、南方の戦線で野火を見て、猿の謎肉を喰ったであろう。これが、事変の結末である。

堂島が、加奈江に手を上げた頃から、この事変の悲劇の結末は予想されていた。
岡本かの子先生は、その結末を見届けないまま、世を去った。
統制経済とミソジニーから、国家総動員、リベラルデモクラシーの死。
この過ちを繰り返すのか？　目下その瀬戸際の、嫌な世相である。東アジアにも事変がはじまりそうだ。

夢中で殴り合ったあの越年の日々を、ふたりはその後の人生において、どんな思いで、回想したのだろう。

（おわり）

※無断転載禁止